

---

**マーク狩獵記 PORTABLE ~ver.カオス~**

STORM

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マーク狩猟記 PORTABLE ｝ver・カオス｝

### 【Nコード】

N2132D

### 【作者名】

STORM

### 【あらすじ】

短編第1弾。本編では語られなかったカオスの過去。彼が騎士へなったときの秘話を短編でお送りします。

## (前書き)

マークはでてきません。

マーク狩猟記を読んでいない方は先にそちらをどうぞ。

マークが出ないということはギャグもないので注意。

その夜はいつもより暗く、静かでした。  
空には星はなく、月もない、真の闇。

これは彼が狩人から騎士になったときの話。

混沌という名を持つ騎士が誕生したたった一夜の出来事。

その日、彼は狩りに手こずり帰りは夜でした。

彼は大剣・蒼剣ガノトトスを背負い工房に向かって歩いていました。

「ここまで長い道のりだったな・・・ついに蒼刃剣ができる」

とても嬉しそうな顔をして、それとは対象的な疲れた体を引きずり  
工房にたどり着きました。

彼は剣を預けて工房の外で倒れ込みました。

疲れた彼は空を見上げましたが、あるはずの光が全くありません。

癒しがほしかったのか彼は暗い空の下、眠りに飲まれていきました。

目を覚ますと明け方より少し前くらいか、空が少し光を宿していま

した。

「寝てたか・・・剣は？」

工房を覗くと既に蒼い大剣がありました。

工房の店主から剣を受け取ると少し明かりを灯した道を歩いて家へ戻りました。

疲れがとれたのか、軽快に動く足は来るときよりも速く動きます。そのおかげですぐに家まで数十メートルというところまでやってきました。

扉に手をかけると何やら声が聞こえてきます。

中からではなく、外から。

後ろを向くと数人のギルドナイトと二人のハンターが闘っていました。

「ランスとハンマー・・・か」

眺めているうちに闘いは激しくなり、ついにはハンターの槍先が騎士の眼を貫き地面に投げ出されました。

ハンターの高笑いする声が聞こえます。

とても忌々しい声でした。

彼はその声を聞くのが辛くなり、背の剣に手をかけました。

「俺に・・・俺にその汚らわしい声を、聞かせるなああああああ！！」

初めて使う剣。これは、鎧竜で試し斬りをしたかった。

彼はそう思いながら、槍を持つ男の首をはねました。

忌々しい声も止まりました。

彼は斬り落とした首を足で潰し、視線を変えて剣を構え直していいました。

「次は・・・貴様だ」

残ったハンターは悲鳴をあげながら逃げていきましたが、無駄でした。

いくら距離があっても、彼から逃げきることはできませんでした。

閉ざされた夜はようやく終わりを告げ、空には太陽が、道には人が。彼はあの後、家に帰りひざまずき、そして涙を流しました。

人の死は喜ぶものじゃないと、叫びながら。

「ライム・・・俺は・・・俺はどうすれば」

遙か西の彼方にいる愛してやまない人の名を呟き、己の失態を酷く悔やみました。

家から出るとあの忌々しい亡骸が遠くに見えました。  
人が集まっていました。

「こいつ、ギルドナイトにやられたんだ」

「両方とも首がないわ」

「残酷すぎる・・・」

市民の声が、彼には深く突き刺さり、目を瞑ってしまいました。

「聞きたくない・・・聞きたくない!」

彼は人のいないところを目指して走り、街の出口へやってきました。

ここなら人はいない。確かにいない。

だけど、それでいいのだろうか。

彼はそのまま口に出して思ったことを言い始めました。

「俺は・・・何をしにきたんだっけ。確か、名をあげるために来たんだ。今の自分じゃ、まだ弱いから。だから、俺はライムと別れた。

そうだったよな。そして俺は言ったんだ」

彼は街に向き直りました。

「東の街に行つて、絶対名をあげてくる。ミナガルデでも、ドンドルマでも知らない人が居ないくらいにな。そして、帰ってきたら結婚しよう。そう言った。この夢を果たさなくては、この街を出ることはできない！」

彼の眼には先ほどのおびえはひとかけらもなく、代わりに闘志が宿っていました。

走ってきた道を辿っているうちに、男がひとり、現れました。

「貴方がカオスさんですね。こちらへ来ていただけじゃないでしょうか？」

「・・・何故？」

「昨夜の出来事。我が同胞のひとりが眼を貫かれたとき、貴方がとった行動。知っていますよ、私たちは」

彼は少し暗い顔をしました。

「その話はされたくない。悪人が上に立つところを見たくなかっただけなんだ」

男は背負った剣をおろしました。



「ナイトに入っていただけではないでしょうか？貴方のような正しい心の持ち主はナイトには少ないのです」  
置いた剣に刻まれた、

G u i l d   k n i g h t s   b l a d e

という文字を彼は眺め、剣を握りました。

「俺は、罪のない人が死ぬのを見たくはない。悪人も殺したくはない。だけど、殺さなくてはもっと犠牲が出る」

「その決断は正しかったといずれ、思うときが来るでしょう」

そう言っつて男は去りました。

「犠牲を最小限にするには、俺が闘うしかない」

彼は眩き空を見上げました。

空には闇のカーテンがかかり、月の光を遮っていました。

この夜も、また暗い光の入らない閉ざされた夜なんだ。

彼の心にそう響いていました。

夜は彼の好きな月も星も、隠してしまうほど酷いものだとは彼は感じました。

「ライムと見る星が好きだった。ふっ、夜は酷いもんだな。俺の大好きなあの人との思い出を隠すのだからな」

その夜は、混沌の騎士を導くための門でした。

その先に立ち入った騎士は、この先、もう、楽な道を歩むことはできないのでした。

「ライム……もう少し、もう少し時間をくれよ。必ず帰るからさ」

彼は、ひとつだけ見えた星に誓いました。

漆黒の剣を空に掲げて。

(後書き)

本編には直接関係ないカオスの過去でした。  
後に関係のある番外編は連載で、関係のない番外編は短編で掲載し  
ていきたいと思えます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2132d/>

---

マーク狩獵記 PORTABLE ~ ver.カオス ~

2010年10月17日02時00分発行